

---

# 迷い音は一つの楽器に

アシヴィン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷い音は一つの楽器に

### 【Zコード】

Z0094X

### 【作者名】

アシヴィン

### 【あらすじ】

これはマジノギという世界の中のどにでもありそりで無い・・・  
ような物語。

一人のエルフの少年は、初めて来た村「フィリア」から出で  
いろんな人の出発点ともされる「ティルコネイル」へ向かいます。  
自分のやりたいことを探すために。・・・なんて書いてるけど、  
180度違います。

アシヴィン姉さんは器用貧乏だし、なんか色んな人達でてるし・・・  
ついてけないなあ?

## 遅めの登場人物紹介・・・？（前書き）

書くのを忘れてた、としか言えません。  
おまけのような感じで呼んでください（笑）

## 遅めの登場人物紹介・・・？

この物語・・・？の登場人物（1-2話までの）を紹介！

主人公：スペルニア（エルフ）

本名覚えてないのはさておき、自分で名前考えられない優柔不断エルフ。

人見知り + 自分の意見を声に出さないのでイラつく人もいるかも？  
アシ姉曰く、「そこが可愛い」

外見は金髪でジェイドソフトテール。目はバジル。

ちょい脇役+番外の主人公：アシヴィン（エルフ）

スキル振りは器用貧乏でぐしゃぐしゃ。今は弓使い。  
誰に対しても同じ態度（タメ口）であんまり気にしない性格？

語尾には時々「にゃー」等つける。

外見はこげ茶色の髪でファンスタイルポニー テール。目はナルシサスブルー。

その他脇役・・・はどうしようかな？  
知りたい人つているのかな？

いそだから紹介しよう。

人間代表：双剣の女神

剣と鎧をこよなく愛する女剣士。

穏やかで素が敬語だけど、誰も気にしてない。（多分）  
結構心配性で、身内の誰かが擦り傷すると慌てる。

外見は真っ赤のロングヘアセット。目はウルトラマリン。

エルフ代表：ルーシュ

料理は最高！鍊金術最低！の見習い鍊金術師のエルフ。  
白が好きで服も真っ白。他の色なんて混ぜない！  
俗に言つぱい子で皿やコップを割る。  
外見は黄色っぽい白でピュアグレース。目はライトブルー。

ジャイアント代表：流星棍

アシヴィンにカボチャローブを（無理やり）着せられてから、すっかり定着した人。  
兄弟・姉妹の中では数少ない物静かさん。  
何故かポーション調合役として扱われている。南無。  
外見は紫色のウェーブ。目はブルーブラック。

「んな感じでビーム？アシ姉ー

「あー・・・ぱりしおやこかんよノヴァリース・・・」

## 遅めの登場人物紹介・・・？（後書き）

ものつす”く適当に紹介終わりました  
読みづらいかもしませんのでご注意を！

（髪型の名前と目の色の名前は mabinogi\_wiki\* から  
転用しました。どんな感じか～というのを見たい人はそちらでご覧  
ください。）

## あるエルフの少年の物語 第1話（前書き）

この小説は初心者が素晴らしい適当に書いてるので、所々グダグダになつてたり、話がまとまつてなかつたり、誤字脱字があつたりしますのでご注意ください。

## あるエルフの少年の物語 第1話

ふと田がさめるとなんだか、よく分からぬ場所にいた

やけに真っ白くて・・・

てこうかフクロウのやつ。しかも数多すぎ。

でもなんでボクはここにいるんだろう?

「私が呼んだのです」

声がした方向を向くとそこには  
すごく綺麗な黒服の女人人がいた。

そしてその人は  
「よつこや、エリンへ。  
・・・お名前は?」  
と言つた。

「・・・ボクは」

パチつという音で夢から覚めた。

また同じ夢を見た・・・

「名前、名前・・・なんで思い出せないんだろ?」

そう、ボクは自分の名前を知らない・・・覚えてない。  
誰かが知ってるような気がするけど、その誰かっていうのも知らない。

あー考えまとまらないよ

まあ寝起きだからだね仕方ないもんね

いろいろ考えながらティルコネイルという町に向かっていた。

理由は・・・

人が少なそだから

「人いないといいなあ。」

と考えるのがボクにとつては当たり前なのだ。

他人と話すのは苦手

他人と一緒に同じことするの無理

自分ひとりだけ、取り残されてしまえば一のに

まだ空がすこしだけ明るくなつてた頃  
ボクは町・・・村?

どつちなんだろなあつて思つべからこのどかな  
ティルコネイルに着いた。

「イメージとちよつと違つけど・・・ひとにならひだしいな」

と思つたその時。

広場に誰かがいた。

うわあ・・・いきなりですか

「・・・音はずしたかな?」

とボソボソ言つたその人は

茶髪でポニー・テール。服はピンクと白。  
すつごい派手好きなのかなあ

「・・・1、2

すこし待つと、リュートの音が聞こえてきた。  
どんな曲かは分からぬけど・・・

ボクは少しの間、そちら邊にある木の陰に隠れながら  
音を聞いた

あ、はずした

「んにゃー!」

ネコがあの人はつ

「弦切れたーーー！」

えー

すぐさまその人は雑貨屋さんの所に飛び込んだ。  
ボクはドアの隙間からこいつ見てみようと思った。

バンッ

「お金おか・・・うお わーー？」

クリティカルヒット。

「いやーめん！ヒールするから許してね」  
軽い口調で言いながらヒールしてくれるその人は  
いい人なのかもしれない。

「しつかしまさか雑貨屋のドアが顔面にヒットするとはしゃーーー  
何してたん？」

「・・・・・」

答えられなかつた

ボクは人が苦手なんだし  
もちろん話すのだつて無理

「・・・あ、初対面だと話しくいわなアッハッハ！  
じゃ、せめて自己紹介しない？」

何言つてるんだこの人  
名前すら知らないボクに・・・聞かせてあげることなんて無いよ

「まああたしからね。  
あたしの名前は・・・」

「いいです。」

ボクはそっけなく答えてそれくわひとから離れた。  
・・・これでいいんだ

## あるヒルフの少年の物語 第2話

その後ボクは、野宿した。

寝てる場所がどれほど危険かも知らずに・・・

「・・・・ふあ～」

思いつきつあくびをすると、周りの風景が変わつてゐるに気づいた  
あれ？ 昨日はもひつよつと広くて、階段とかもあって開かない扉も  
あつた  
・・・はずなんだけどなあ？

今見ている部屋っぽいのは、狭くて田の前には変なおばさんの石像  
があるだけ。

このおばさん、寝る前にも見たつけ？

「・・・・」「」「」「」  
ぱつぱつと言つた。

とにかく出口を探そひと、田の前にある門？を潜り抜けていった。

1時間後

「これ、なら、人の・・・げほつ  
方が、まし、だよなあ・・・ひいはあ」

なんですかコレ

変な動物ばっかり出るんですけど。

ネズミはちつちやいけど噛み付かれると痛いし、  
コウモリは飛んでくるからこわいし、  
クモなんて・・・論外だ・・・

大きな赤い鍵は重たいし・・・はあ

で、出口どこだあ

ぶつぶつ言つてるそばからなんか大きな鍵穴のある扉が見つかった。

「出口ありますように、出口ありますように」  
そう祈りながら鍵を開けた。

ガチャーン！

祈りは届かなかつたようだ

大きく広がる部屋の中には・・・苦手な・・・  
クモがたくさんいて

更にトツゼンヘンイ？で大きくなつたクモが一匹いた。

泣きたい。

誰かに助けを・・・

なんて思つたのはボクの人生の中でこれが初めてかもしれない  
だけど、助けを求める相手なんていない。  
いなくていいと望んだのだから。

そうしてゐうちに赤いクモがボクに気づいて、早足でこっちに近づいてきた。

ああ、ボクはここで死ぬんだ  
それもいいかな

「間に合えっ！」

ヒュン！

いきなりで何がなんだか分からなかつた。  
だけど今まで目の前にいたクモは矢に貫かれて・・・倒れてた

「ちょい君、大丈夫？ ケガは？」

声のする方向を向くと、そこには昨日広場で会った人がいた。

「なんで、ここが？」

「朝方、トレボーから聞いたのさね。

『エルフの少年がアルビダンジョンに向かつたまま、帰つてこない』

つてね」

だ、だんじょん？

ボクそんなところで寝てたのか・・・

「で？ ビーしてこんなダンジョンに？」

「野宿しに・・・」

「・・・どーりで祭壇に置かれたアイテムが『初級通行証』じゃない訳だにゃ」

しゃきゅーつーじーしょー・・・？

「後で説明するから、君はここに居てね～

「・・・え」

数分でクモを全滅させて帰ってきたこの人は一体何者なんだろ  
しかも弓。

「よつし、終わり！ ほら箱開けにいこう！」

「は、はこ？」

強引に連れて行かれた先は、最初みたおばさんの石像と  
2つの鍵のかかった宝箱がある部屋だった。

「好き方選んでね～」

「ボク、鍵持つません」

へ？と首をかしげる弓使いの人。

「鍵は上から降ってきて絶妙のタイミングでカバンの中に入ってる  
はずだよ」

「え・・・あホントだ」

どーなつてるのこの世界

パチパチという音で我に返った。

目の前にはキャンプファイアがあつて  
横には広場で会つた人が座つている。

「あーべつねげるー」  
キャンプファイアさえあればどーでもべつねげるところの人は  
ある意味尊敬できそう。

「あ、 そつそう

昨日自己紹介の途中で終わつたから、 今続きしない?」

まだする氣でいたのか。  
でも助けてくれた恩人だし・・・それに  
この人だつたらいいかな、 と思つた。

「昨日はすいません」

「へ？ ああ 気にしてないない」

あつはつはと笑いながら頭をポンポンされた。  
すこし悔しかつた

「んじや、 あたしからね。

あたしアシヴィン。 フルネームもあるけど・・・まあそれは置いと  
く。

君と同じエルフでねえ職業は・・・器用貧乏へ

「工具使いだけじゃないんですか？」

「魔法も時々やるし、 時には剣だつて使うし・・・

あ、 楽器もやつてるよー。」

いろいろやつてるんだなーこの人。  
でも大変そうだなあ

「はー、 じゃあ次！」

自分のことを忘れてた。

## あるエルフの少年の物語 第3話

「ボクは名前知らないんです。だけどフィリアから来たっていうのは分かるんです」

「ありや、名前知らないのかあ。

ナオから自分で名前考えろ的な事言われなかつた？」

「？？？」

ナオって誰ですか。

「ナオ知らん？真っ白なところと黒いチャイナドレス  
風の服着た  
女性なんだけど。」

・・・あの人だつたのか

「覚えてないです」

「そつか。まあ気にしない」

今だけ、ボクの記憶力のなさを呪つた。

「うーん、名前ないと不便？」  
ちょっと考えた。

・・・不便すぎる

「不便です」

「だよねー・・・」「ーん

アシヴィンさんは唸りながら言った  
何考てるのかな?

すると突然

「あ、いい方法あるよー」

「え?」

「君、あたしの家族になつたらいいよー」

・・・」の人よくわからん。

(朝)

昨日は変な夢をみた。

夢であつて欲しいと思つた。

いやそうじやなかつたらボクはどうすればいいんだろ?.

「おっはよー!」「ハンドルをとるよー」

やつぱり夢じゃなかつた。

ゆうべのアシヴィンさんの「家族宣言」が痛い・・・  
なんていきなり？っていうか名前だけでいいのに。

「心配しなくつたつてあたしにやー妹＆弟わんさかいるもの。  
一人増えてもむしろ歓迎だつて！」

今なんていつたんですか。  
そのセリフなんか怖い。

差し出された「涙のうどん」を食べながら話を聞くと。

アシヴィンさんは自称寂しがりや。

で、ここに来て最初の目標が  
「大勢の家族を作ろう！」  
だつたという。

・・・そういう風に考えれるアシヴィンさんが羨ましい

「んでねーあんまりにも人数多すぎになつたから、分けたの。  
あたしんちの名前はクラシアス。もうひとつがクウォーエルティイ。  
」

うわあ、この人大丈夫かな

そんなフルネームまで作つて何が楽しいんだろう？

「名前、せつかく自分で考えて自分で言えるんだから」「フルネームくらい、いいと思わない？」「…ネーミングセンスないってのは認めるよ。うん。」

結構面白い人だ。

「じゃあボクはどっちになるんですか？」  
「…入るとしたら。」

「エルフだから…・クラシアスかな？」

どつやら種族別に分けられているらしい。  
人間のほうが多いって言ってたし、いいかな

「で、どーする?」「ちこくへる?」

悩む。

ボクは一人でいたいと思った…  
だけど、今はすこしいいかなとか思つてしまつ。  
うーん

「考えさせてください」  
これしか言えなかつた

「うん、ひとつでもいらっしゃい！」

歓迎するよー」

にっこりと笑いながら語ってくれた。

そして途中の道でわかれ

「暇だしついてっていい?なんか心配だし」

られる訳がなかつた。

## あるヒルフの少年の物語 第4話

「アシヴィンちゃんが作れる、ところより作り直した」はんは全て

自動で「涙のうどん」に変化するところが判明した。

毎朝、うどんばかりだったから

一回質問してみた。

「なんでもうどんだけしか作りないんですね？」ヒ。

「あたし、クッキングポーションお気に入りでやーあ、バイクドポテトにもクッキングポーションいれるといどんにならんだけよ？」

面白いよねー！」

えー・・・

それ面白ことこより不思議の領域じゃ・・・

でもなんか美味しい。涙あふれるナビ。

ちなみにこの「涙のうどん」は食べると一定時間泣いてばかりになる、といつ

迷惑な効果があるらしい。

おかげでボクの服がぐしゃぐしゃになってしまった。

アシヴィンさんも同じじらしく

「今からひらひらにいつて服変えるんだけど・・・君の服も選ぼうか?」  
といふ感じになった。

「いえ、大丈夫です。このローブ乾き早いし・・・」

「風邪ひいたら困るでしょー?案内するからおいでよー!」

かなり強引だ。

ティルコネイルの広場から、何かの羽根のよつなアイテムを使った。  
すると、農場のようなのどかな場所に出た。

「ふわー」

「そ、ここがあたしんち。ビーザビーザ!」

周りは砂漠みたいだけど今ボクがたつている場所は緑色の庭。  
畑が3つあってその周りを丸太の柵が覆っている。

畑の周りには花畠があつたり、池があつたり、リンゴの木と赤いハーブまである。

そこにビビンと大きい家があるわけで。

「あら・・・お客様ですか?」

紺色の髪と目をした、ヒーラードレスを着た女性が言った。

そういうえばアシヴィンさんもヒーラードレスみたいだけど、この人

の着てる物と  
ちょっと違う。

「ふつふつふー家族予備軍だよーー。」

「この間に・・・ってそうなってたんだつけ。  
忘れてた

「・・・姉さんの悪い癖ですね。その心配性と家族につれこみはほ  
どほどにしてください。」

「いいじゃないのさー賑やかがいりばん!」

アシヴィンさんって姉なのに威厳なし?

「ひと後でも紹介するけど、とりあえず!  
この子はブルーカノン。」

「初めまして。ブルーカノン・クウォーツルティと申します。  
名前が言いにくいのであれば、カノンで結構です。  
「は、初めまして。」

わざわざと「一寧な血」を紹介で、アシヴィンさんの妹さんとは思えない。

「・・・では私が案内します。姉さんは洋服を。」

「ありがといやーー。」

中は広いとも狭いとも言べず、ちよつといい感じだった。

「やういえば・・・貴方のお名前を聞いてませんね。」

よろしければ・・・」

「ボク、名前知らないんです。すみません」「いえ、いらっしゃいきなりで申し訳ありません」  
なんかすっごいやつにくる。

そんな会話をしながら、広い部屋に案内された。

「いじでお待しちゃう。姉をよんでも・・・」

「おっまたせーーー。」

「・・・・・」

噂をすればなんとや。ってこいつか噂すらしてないー。

「いやー君の服選んでたら迷っちゃってーーー」と言しながらテーブルの上に着、服を並べた。

「イベントでもひつたやつばつかだけど、これしか男性用ないんだ  
『めんな』

「そ、そこまで気を使わなくとも大丈夫ですよ  
つてこいつがどれも見たことない服だなあ」

ひとつはローブみたいな服でベルトみたいなのがついてる。  
色はボクの目に似た深緑。

もうひとつは・・・寝間着みたいな服で上着とズボンに分かれてる。  
色は黄色と緑。

最後の服は・・・恥ずかしくていえない。

「どうかな？」

「えっと……じゃあこれ……」

ボクが選んだのは「ひま」。動きやすかったから。

「OK…じゃそれ貰って…」

「ありがとうございます」

着てみるとやはり動きやすかった。  
それに黄色はカライじゃない色だった

「ねねねねねねねねねねねねねね…」

「ふうへお似合こだわよ」

なんか褒められたると思われやう。

## あるエルフの少年の物語 第5話

服を貰つたその後、いろんな人がやってきて自己紹介をした。

アシヴィンさんと似た茶髪のくせつ毛で、カノンさんと同じ服の色違いを着ているノヴァリースさん。

鎧が普段服という真つ赤な髪に真つ青な目をした双剣の女神さん。エルフらしい雰囲気<sup>じゅんいき</sup>を持った、薄い紫色の髪と、アシヴィンさんと同じ目の色をした心さん。

無口そうな自称ヒーラー見習いの、オレンジ色の服が似合つ橙さん。かぼちゃローブを無理やり着せられたという、かつこいジャイアントの流星さんなどなど。

まだ他にも自己紹介してくれた人がいるけど、一度には覚えきれない。

つていうかアシヴィンさんだけ家族にしてるんだか・・・

「みんないい奴だから、警戒しなくても平氣だよん」

といわれても緊張しまくつてるボクにはそれは無理だ。  
だってこんな大勢の人と触れ合つなんて想像もしてなかつたから。

「姉上。その子を家族に入れるのは反対はしないのだが・・・  
顔が真つ青になつてゐるぞ。」

「わおー..どうしたの? 休む?」

流星さんとアシヴィンさんが心配そうにこちらを見る。

そりや真っ青にもなる。

慣れてないのだから。

つていうか緊張しちゃう。

「お言葉に甘えさせてもらつてもいいですか・・・?  
『いいよ』『よーし』、案内するかい」

でも、ここまで他人と話しても  
いやとは思わない自分。

・・・びっくりだ

慣れてる途中なのがなあ

そうだとしたら

家族になるの、いいかも知れないなあ  
それに、ここにも馴染んでみたい。

「はいな、ここで休んでね！欲しいものあつたら遠慮なく言つてい  
いから～」

「えつと、アシヴィンさん」

「お？何？」

「欲しいものあるんですけど・・・」

そう思えれたのはこの人のお陰かもしだれない。  
だから、そう望んでもボクは悔やまない。

「ボクを、家族にしてくれますか？」

アシヴィンさんはゆっくりとボクの方を向いて、笑つた。

「歓迎するよ、新しい家族・・・いやあたしの弟さん！  
・・・よろしく、姉さん」

そしてボクは、アシヴィン姉さんの弟としてクラシアス家に入つ  
た。

自分が思つたことが唐突すぎて、自分でもびっくりした。

そしてその後眠ると、またあの人が出た。

「お久しぶり、ですね。」

最初に会った黒服の女人。名前は・・・なんだつけ？

「名前、なんでしたつけ？」

「覚えてないんですか？・・・私はナオです。」

ナオさん・・・ナオさん、よし覚えた。  
こうでもしないとボクは覚えない。

「・・・それで、お名前は決まりましたか？」

「まだですけど、家族はできました。」

「それは素晴らしいことです・・・よかつたですね」  
まるで自分のことのように喜ぶナオさん。

「では、名前は『家族と一緒に考えたほうがよろしいかも知れませんね。』

「そのつもり・・・です」

ナオさんは優しく微笑み、「ではそろそろ戻る時間です。」と言つた。

「今日も貴方が日常が平和でありますよ……」

ボクもナオさんも光に包まれたと思つと  
目が覚めていた。

「……ハイテク?」「  
独り言をつぶやく。

（朝）

「ふいー」

背伸びをしながらあくびをする。

「あつあ!」はんだよー!弟よー!!

ノヴァリース姉さんが元気よく部屋に入ってきた。

「ルーシュの!はん、持つてきたよ~」  
「わ、いただきます!」

ルーシュ姉さんは白い髪に白い目。ヘルフ。鍊金術師。うしごけび。  
・ デジな所がある。  
けど、『はんは』とっても美味しい。

ボクは昨日、真っ青になつて倒れかけ寸前だったのでベッドの上で  
食べることにした。

真っ青になつた理由は・・・いわなくてもいいか。あはは

トーストの耳のところをカリカリかじつていると、音楽が聞こえる。  
アシヴィン姉さんの日常的な事だ。

とても陽気な音楽で、ちょっと樂しくなつてくれる。

やつしてまた、ボクの日常が始まる。

## あるヒルフの少年の物語 第6話

ボクがクラシアス家にはいつてから、1ヶ月が過ぎた。時間がたつのは結構早いなあ・・・

家族全員とももうすっかり慣れてきたし、更には妹さんまで出来た。姉さん、ほどほどに。

「にーちゃん、おかしちょーだい」

「せっしき食べたばっかだろ？我慢しなきや」

お菓子を毎日ねだるのはヴィニーハンス。わざわざ言つた出来立てホヤホヤのボクの妹。

「おかしさ、エンスのエネルギーなのー」

「じゃあそのまま丸になるんだねー。マタタビ茶のんだ姉さんみたいに」

「・・・やだ」

「じゃあもうダメだよ」

「・・・呼んだかいなスペル」

ペンギンロープが似合つようになつたアシヴィン姉さんがやつてきた。

あ、スペルっていうのはボクの名前の愛称。ようやく名前が決まって嬉しい。

そう、これからボクの名前は「スペルニア」。みんながつけてくれた、名前。

「ユーチャン、ヒンスはねーちゃんのためこきのみをとひへるー。」

「あ、いつてらっしゃい。氣をつけてねー！」

「あたしもついてくよ・・・ってか待ちなさいヴィー！ヒンスー！  
置いてくなつ！」

今日もボクらは賑やか。

・・・ちなみにマタタビ茶は、飲むと思いつきり太るつて姉さんが  
言つてた。  
恐ろしい。

「ちょっとタラまで出かけてくるよ。留守番よひじへつー。」

「うん、いつてらっしゃいー！」

この頃姉さんが遠くまで出かけることがある。

まあ、ボクには関係ないけど・・・

「・・・スペルニア。私は新しい本を買うから。」

「その前に整理したほうがいいんじゃ・・・」

「もうしてあるから、大丈夫よ。」

「そつか

心姉さんは本が好きだ。

中でも「トレイシーの秘密」と「可愛いのはイヤ」・・・  
どんな本なんだろ?

「ふえー」

部屋の中で一人になつたボクは背伸びをした。  
そして、テーブルに寝そべつたまま寝た。

（夕方）

おかしい。

姉さんが帰つてこない。

昨日までは、この時間に帰つてくるのに・・・

「・・・すこし遅いわ。」

「ですね。」

心姉さんと女神姉さんも心配そうだ。

「ボク、探してみる  
どこに行つたか忘れたけど。

「・・・待ちなさい。」

「待てないよ！」

「そうじゃないわ、これを持ってこきなさい。」

渡されたのは、新品のブローデソードとカイトシールド。  
姉さんが向かつたところは危険なところなんだね？

「用心のためよ。気をつけなさい。」

「分かった、ありがとうー！」

そしてボクはアシヴィン姉さんを追つた。

目的地も知らぎに。

数時間後。

迷つたあああああ！

## あるヒルフの少年の物語 第7話

目的地覚えてない +

今いる場所がどこだか分かつてない

=迷子

数式作つてビーすんの! -?

ああああじつしよ、ボクが姉さんを探すんじゃなくてみんながボク  
を探す状態に  
なりかけだよう・・・・  
回じよつな道ばっかだし

とひまひま歩いてこむと、姉がちょっと聞いれた。

「・・・・・ははは」

「・・・・・・をしょー」

「・・・・・ふふふ」

この声、なんだろう?

小さな子供が遊んでる声みたいだ。  
空暗いのこ、まだ遊んでる。

なこよ空なんて。  
・・・空?

代わりに変な色の雲が広がってるだけ。

じゅねいじなんだ？

「貴様つ!!」セ二で向をして一る!!

1  
?  
!

後ろから叱はれたのでひっくりした。

「なななんなんですか！びっくりさせないでくださいー。」「あ、いやついいな・・・すまない。」

• •  
• •  
• •  
• •

静かになつた。  
どうしたのかなあ？

「じゃなくてだな、お前はここで何をしている？」

「ボクは姉を探してゐる途中で迷子になりました。」  
「は？」

「・・・ふむ、出口に案内しよう」

親切な人にあつたなあ

時間がどのくらい過ぎたんだろう？

黒いローブの人に案内されて、ボクは歩く。

「さあ、着いたぞ・・・」

「ありがとうございます」

大きい筒のような壁を抜けて中に入つてみると、かまびのよつなものが並んでて  
他には誰も居なかつた。

「これ、どうやつて出るんですか?」

「ああ、それはな。」

そう言われた途端

力が抜けていつた。

「お前がこの実験の・・・生贊になれば。」

何のことか分からず、氣を失つた。

田を覚まして見たものは。

黒い闇が広がる場所

その中に感じる生命体

感覚すらない闇の中で聞こえてくる声。

「・・・もうすぐで実験を開始できます。」

「そつか。準備を急げ。」

誰かが、実験をしようとしてる・・・?  
何を使って?

「子供を見張れよ?逃げられるといこの実験は失敗する。」

「分かっているさ、早く準備しろ。」

子供を・・・使うなんて

何がしたいんだこの人たちは

「エルフも混じっているが・・・むじういい結果を生み出すだろ?」

「捕まえてよかつたよ」

それってボクの事ですか・・・やだなあ

他にも何かいつてるけど、いやな気分になるから聞かないことにした。

「さあ、実験をかい？」

「はいはいはーい、ヤリマでにしてね？」

聞き覚えのある声が響く。

「あんたら、今なら許してあげるからセー降伏したら？」

「何をほざくか・・・雑魚が」

「カツチーンと来たわあ、今の・・・」

あれは・・・姉さん？

「ん・・・?スペル!？」

「あのエルフの子供の知り合いか？残念だつたな。  
これから実験で使われるのだからな！」

「・・・」

直後、姉さんがまばゆい光に包まれた。

「私を怒らせたことを、不幸と思え」

そう言つと、光の中から姉さん・・・え、あれが姉さん!?

「な、なんだと！」

姉さんの姿は普通とは違つてた。

## あるHルツの少年の物語 第8話

あれは、姉さんなのか？

全身は光に包まれて。

背中には白い半透明の翼。

「その子達を今放すのなら、Iの場は見逃せ。それを断るといつのなら・・・」

「どうやるとこうんだ？」

「Iの場を消し飛ばそう。今の私になら出来る事だ。」

話し方まで変わってる姉さんはすげく怖い。つていうか一体どうしたの姉さん！

「待て・・・」

「メリキル、危ないぞ」

ラスボスの名前なんだろーか。

「放す、といつのは守りへ。」

「・・・ならば今放せ」

「それまではいらの実験が終わってからにしてもらひつかー。」

「実験開始！」

闇の中に苦痛の声が響く。

ボクも叫んでるのか、分からぬ。

ただ、姉さんが光の槍を飛ばすのが見えただけ。

「・・・・・」

「・・・・スペル！起きて！」

いつの間にか、また氣を失つてたらしい。  
でも生きてる。

「はあ、よかつた・・・死んでしまうかと思つたよ

「…………姉さん、他の子は・・・？」  
「・・・」

姉さんは暗い表情を見せた。

「耐え切れなかつた。もう手遅れだよ・・・

何故ボクだけ生き残れたんだろう?  
何故こんな事をするんだろう。

許せない。

「スペルはここから帰つてね。・・・あたしはタラに報告に行くか

ら。

「待つて姉さん！」

「？」

「ボクも協力させて欲しいんだ」

それから、ボクは姉さんと一緒に行動するよつになつた。

## あるヒルフの少年の物語 番外編 ～影の世界へ～

あたしは、シネイドおば・・・じゃなくてさん、ね

その人からクエストを受けて今！

絶贊影世界突入中。

どうやら、この奥に変な実験しようとしてる輩がいるらしいよーう  
ん。

「あーあ・・・だつるー」

ブツブツ言つのはあたしの十八番だつたりする。

そうして20分もたつた。.

「・・・おねえちゃん、そこでなにしてるの？」

「あーーー！」

9歳か10歳の子供に出会つた。

親どーしたの？

「君、おとうさんかおかあさんは？」

「おとうさん・・・はいまじ」となの。だからあそぼう？

「1)めん、急いでるから・・・ー？」

突然あたしと少年の周りに敵が現れた。

「おねえちゃんのおともだちっつわあ～すつ」にな。「いやいやいやあたしこんな友達いないし！」  
そんなのとなりたくないし。

出てきたのは、ゴーレムと・・・硫黄クモ。

「頗るざつかにかくれ……」

「あははーーおねえちゃんみてーのぼれたよー?」

少年が、ゴーレムに乗つて遊んでる。

卷之二

「降りなさい！」

ズドン！ガラガラガラ・・・・

「アーティストのためのアートセミナー」

「…君、天然？」

「ゴーレムが倒されて、ムカついたのか。  
クモが一斉に襲い掛かる。」

「アーティストの世界」

數分後、全滅。

いやもあひるを敵が。

「あやせははは、もうおしまー?..」

「つん、お終いだからねー」

敵と戦う以上の少年の相手は疲れるかも。

「あのねえ、おねえちゃんがあそんでくれたおれいにねえ

おどりさんとこひつれてつてあげるー」

「え、いやちよつと待つて・・・うわおー。」

ぐごぐい引つ張られていくあたし。

「つこたーー!」がおどりさんとじょじょー。」

「うわ、怪しいなあー」

影世界にはよくある円状の壁。ところついとま・・・

ビンゴー!

「中入れてもらつていい?」

「うーん・・・まつてて!きいてくるー」

そう言つて少年は壁の内側に入つていつた。

「おっそいなー もう入っちゃえ！」

30分待たされたら誰だつてこいつはまずい！

といつわけで突入。

はい、大当たりビストライクーパチパチパチ

「はいはいはーい、そこまでにしてね？」

どんな場面にたつても素でいられるあたし。

「あんたら、今なら許してあげるからさー降伏したら?」

「何をほざくか・・・雑魚が」

「カツチーンと来たわあ、今の・・・」

ま、そうなるつていづのは予想してたけど。

アホだし（笑）

と、鼻で笑つてたらとんでもない人物発見。

スペルニアらしきエルフが縄でぐるぐる巻きにされた。

「ん・・・? スペル! ?」

確認のため言つてみる。

「あのエルフの子供の知り合いか? 残念だつたな。  
これから実験で使われるのだからな!」

「・・・・・」

その瞬間、頭の中に満ち溢れた感情は「怒り」子供を使って実験なんて。

更に大事な弟までその材料！？ふざけなさんな。

即、「光の覚醒」を使う。

体が軽くなり、力が満ちてくる。

半神の証の白い半透明の翼がつく。飛べないけど。

あたしは言つ。

「私を怒らせたことを、不幸と思え」

その場に居る全ての敵に、警告を。

## あるヒルフの少年の物語 番外編 ～影の世界へ～2

淡々とあたしは告げた。

「その子達を今放すのなら、ここの場は見逃そつ。それを断るところのなら……」

いつたん言葉を切つて相手の様子を見る。

「どうするといつだ？」

「ここの場を消し飛ばそつ。今の私になら出来る事だ。脅しじゃない。本氣でそつするつもりだ。」

「待て……」

まだ声変わりしていないような、少年の声。

「メリキル、危ないぞ」

ビーヴやーメリキルとこいつが前からしきナビ、今のあたしには関係ない。

相手も動じておらず淡々と聞い。

「放す、といつのは守りや。」

「・・・ならば今放せ」

本当に守るかビーヴかもわからない。つていうか守らないでしょ？

「それはいかの実験が終わってからにしてもいいつかー！」  
ほらね。

「実験開始！」

まさかすぐ始めるとは思わなかつた。

あたしはすぐさま「スピアオブライト」を撃つ。

田の前が消し炭になるまで。

怒りが収まるまで。

「おーい！スペル！

「スペル！起きて！」

ほっぺたを何回か往復ビンタする。

ゆつくりと田を覚ますスペル。

無事でよかつた。

「はあ、よかつた・・・死んでしまうかと思ったよ」

その言葉も届いてないのか、スペルは周りをキョロキョロ見る。

そして聞いた。

「・・・姉さん、他の子は・・・？」

「・・・」

一瞬迷ひ。

言つていいのか、言つてはダメなのか。

隠し事は出来ないのだから言つたほうがいいんだろう。

「耐え切れなかつた。もつ手遅れだよ・・・」  
「コレしかいえない。」

音もなくその場に倒れ、血を流していないのに息をしていない子供たち。  
それをそのまま言つなんてできっこない。

「スペルは！」から帰つてね。・・・あたしはタラに報告に行くから。

「待つて姉さん！」

「？」

突然、スペルが叫ぶ。

あんまりそういうことないので驚く。

「ボクも協力をせて欲しいんだ」

分かつた。一緒に行こう。

さて、手続きが大変そーだにや。  
あたしも頑張らんと。

あるHルツの少年の物語 番外編 ～影の世界へ～2（後書き）

かりよつと煮詰まつておきましたので、続きは10日ぐらじになつまゆ～

## あるエルフの少年の物語 第9話

「アシヴィン姉さんは、忙しかつて手続きを終えた。

何の手続きかといつと、ボクが姉さんの補佐・・・だつけ。  
補佐になるための手続き。

「ふいー終わつた終わつた！」

「お疲れ様、姉さん。」

わざわざ、「連れてつて欲しい」と言つたとき反対されるかと思つた  
のよ。

なんですから、「いこよ」になつたんだわ。

「実地訓練と思つといい・・・かな?近接やるんだし。」

あーそれでかあ・・・

ボクは姉さんの、器用貧乏ぶり(弓に近接、魔法に吟遊詩人。)を見て

「・・・どれか一つに絞ろ!」と決めた。

その決めた道が、剣士。

エルフなんだけどね。

「エルフ剣士なーんて今じゃいへりでもこるさね。あたしもだし。」

「姉さんは器用貧乏でしょ・・・純粹な剣士つているの?」

「こるよ?普通に。グラティウスとヒーターシールドもつてワイン

ドミル大好きなエルフとか。

フル改造メイス持ちでスマッシュマスターエルフとかいるしねえ。」

すごい人もいるもんだ・・・  
ボクも頑張らないと！

ぼす、と何かが落ちた音がする。  
横に振り向くと、姉さんの頭の上に巻物のよつた紙が乗っかっている。

「ぬあ、フクロウめえ！」

姉さんはフクロウ便をうまく受け取れないみたいだ。（反射的な意味で。）

「おー・シネイドおばは・・・じゃなくてシネイドさんが呼んでるわ。  
行くよー！」  
「うんー！」  
シネイドさんて人、老けてるのかなあ？

「何が『』用件・・・ああ、アシヴィンさんですか。」

老けてない、老けてないよ姉さん?

・・・ほん

シネイドさんはとても美人だった。ベージュ色の髪をしてボクの  
髪型にちょっと似てる。

だけどちょっと怖そうな雰囲気・・・

「は」よ来ましたよーっと、んで用は?」

「ジヒナの所在を確認できたので、タルティーンの同僚コレンを訪  
ねてください。」

「・・・それはフクロウでやらんかい。」

「善処しましょう。」

「うわー、会話に入れない。」

「ところでアシヴィンさん、そちらの方は?」

「あああたしの弟でスペルニア。剣士見習いだよ。」

「よろしくお願ひします。」

シネイドさんは顔をしかめる。

「・・・信用できるのですか?」

「当たり前さね。」

何の話?

「コレンセーん、いませんかー」

「ああ、レジだよ。」

「いなーんなら帰りますよー」

「レジに居ると言つてはいる・・・」

変な会話。

「ふう、ふう・・・いい加減見えないフリから会話を始めようとするのをやめないか」

「ひー、はあ・・・やなこつた(笑)」

10分後、やつと姉さんの遊びが終わった。  
長いこと立たされるボクの身にもなつて?

「で、レジのエルフの少年は?」

何回聞かれる羽目になるんだろう

「あ、弟のスペルニア。剣士見習いであたしのパーティメンバーだよ。」

「ほー・・・アシヴィンの弟とは思えないな・・・」

「何をうー?」

これいつまで続くんだろうね

「ほー、レジ一ト上がりー。そひあはせりへー。」

「これで・・・終わり！」

ボクは最後の、ゴールドボーンアーチャーを倒した。  
思いつきり防御が固くてきつかった・・・

「後はジエナみつけて・・・ああいたい」

影ミッション掲示板のすぐ近くに、ジエナさんはいた。

## あるエルフの少年の物語 第10話

(ジロナさんの会話内容は、事情により省略。)

その後は次々に知らない人と会っていく。

元老王政鍊金術師のレノックスさんにジャレスさんとか。

「うえー・・・きつすぎる」

「大丈夫?」

怒涛の勢いでクエストをやつてたからスタミナが0になつてた。

「これ、最後のスタミナポーション。後で買わないとね」

「クエスト報酬で稼いだから2人分のスタミナポーションなんて楽

々買えるわー

うふふふふ

「その笑い、誤解されそうだね・・・」

久しぶりにのんびりとした会話をしたら、またフクロウがクエストを  
ぼふ。

「ぬぬぬぬぬ・・・」

姉さんは、頭でクエストを受け止める（物理的に）

「スタミナポーション飲んでる時にもつてくるなあああああ…」

「どうやらポーションを吹いたらしく、半分に減っていた。

「あーあ、意外にポーション美味しいのにもつたいたいない…」

「え、美味しいかなコレ。」

「美味しいじゃないかアハハハハウフフフフ

「それ中毒だよ…? ちょ、ヒーラーセーン!」

今日はよく『つかつてて、戦闘終わつたあとガブ飲みしてたからな  
あー・・・  
たぶんわつものがトドメになつたのかも。

姉さんがやつと皿を覚ました頃には、もう夜。  
クエストすっぽかしたかも。

「うあー目が回る。」

「はい、水・・・飲める?」

「ありがと。」

姉さんは水を飲んで落ち着くと、顔が青ざめていった。  
クエストに気づいたらしい。

「・・・もしかしてやばい?」

「たぶん。」

「あのおじさん、時間につぶさこんだよなあ。今からでも行こうかにやー」

「ボクは別にいいけど。」

そして城に向かつた。

「遅いぞ。」

「ああはいはいすみませんねえ」

態度悪つ

この後の会話も事情により省略。（大人の事情なんだつてさ）

## あるヒルフの少年の物語 第11話

「あのおっさん嫌い」

何か気に食わないとすぐ嫌い嫌い言う姉さんは大人気ない。

「どこの嫌いなのさ・・・いい人だと思つ子だ」

「偉そうなのは全否定なの！あたしん中じやね」

「わー・・・」

そこまで嫌いなのか。

ぼす。

また姉さんにクエストが降つてきた。（もちろん頭で受け取つた。）

「はいはい今度はだ・・・」

言葉が切れた。

「どうしたの姉さん？」

「あー・・・更に嫌いな奴からだわ・・・」

クエスト内容が見えない。

「あんまりスペル連れて行きたくないけど・・・来る？」

「？」

どんな意味なんだろ？

危険といつことなのか、それとも・・・

それでもボクはついていく。

「行くよ」

「うー、分かった。その代わり……あたしの側を離れないようにしてね？」

「うん！」

（数時間後）

「大丈夫……うわお……」

27回目の行動不能。

痛い！めっちゃ痛い！鍊金術師苦手なんだよーーー！  
水とか空気砲とか拳銃の果て焼いてくるし……

「回復するから座りーにや」

「ありがと……姉さん」

包帯でぐるぐる巻きにされたあと、ヒーリングの魔法をかけてくれた。

「う、マナ切れた……」

「マナポーションないよ？」

「んやあれ使うから平氣！スペルは一瞬田つぶつてなー」

何をするの、と聞いijtとしたとたん

姉さんが光に包まれた。

あの時のように・・・

「ふう・・・まだ慣れないなあコレ」

「ねねねね姉さんなにそれ」

そつまさにあの時の姿。

背中に半透明の白い翼をつけ、全身が光ってる。

「あ、スペル知らないか・・・」これは『光の覚醒』っていうスキル。  
神様の力を分けてもらってる感じ？」

「神様あ！？」

姉さん神様になっちゃったの！？

「おーい大丈夫かいな？」

「姉さんもモリアン様みたいになるのー？」

「お・ち・つ・け」

ゴンッ

「姉さん、ハンマーはひどいや・・・」

「田覺ますにゃー」れつくりが十分でしょー  
たんこぶが出来た。

「ちなみに、あたしあんな天邪鬼おぼれたらしゃーなりたくないからね？」

「そこまで言つへ？」

一体どんな神様なのさ。モリアン様。

「よつし、メモいただきいー！」

「それドロボウ・・・」

「いーから行くよほりほりほり」

ぐごごい押してくる姉さん。誤魔化しきれてないよー。

## あるエルフの少年の物語 第1-2話

姉さんがメモを読む。

「んー＊＊＊＊＊」

なんてしゃべったの？

すると床が動き出し、螺旋階段のよつになつた。

「地下水道レッソーンー！」

「お、おーー！」

「スペルー生きて……ないか」

38回目の行動不能。

ゴーレムめー斯顿プ禁止にじるーつー

「かえつて足手まといだなあ……」

「ま、初心者なんだし気にしない！」

そうして進んでいくと、広場に出た。  
中央に誰かがいる……っぽい？

「来たか……」

「お呼びですかいな？」

その人は片方の腕が機械みたいになつてて、背中には黒い翼。  
黒い（恥ずかしい）服を着ているおじさん……

「アシヴィン、部外者を連れてきたのか？」

「部外者じゃないよー弟だよー」

「私が呼んでいない者は全て部外者だ。出て行つてもりあつか

「別にいいでしょーに・・・神になるだけだし」

「・・・・そこのエルフ。ここで聞いたことを

「分かつてます・・・」

怖くてそれしか言えなかつた。

「物分りがいいな。ならば・・・」

「ここからはまた大人の事情入るつてさー

「姉さん、本当の神様になるの？」

「しつ・・・今は静かに」

「？」

聞かれたくないのかな？

変なおじさんが消えた後、姉さんは羽を使つた。

一気に風景が変わつて、地下水道からタラのストーンヘンジに着いた。

どーいう仕組みなのか未だに分からぬ。

「ここならいいかな・・・？」

「何が？？」

何かあつたつけ？

いきなり姉さんはキャンプキットを出して、設置した。  
上の看板には「入るなキケン！」

・・・危険地帯作つてジーすんの！？

「ほり入る入る 大きい肉！」馳走したるからにや～！」

「それはやめてくれえええー！太るよーーー！」

キャンプの中に蹴飛ばされながら、ボクは中央の焚き火（いつ火）いたんだろ？」を避けた。

前髪がちょっと焦げた・・・ジリシモ！？

「さつきのおっさん・・・見たでしょ？」

「う？はひほ？（なにを？）」

「あー食べてからでいいよ・・・つてそれあたしの一ー！」

ボクの方がよく『はん横取りされるから、仕返しだい。

「で、なにがなのさ」

「さつきのおっさん・・・翼ついてたでしょ？」

「うん、それが？」

「・・・やっぱり天然だにゃ。まああのおっさん神よーってだけ

「ふーん神さ・・・ぶふつ」

あまりにもいきなりで『はんを吹き出してしまった。

「ちよちよちよ、大丈夫！？」

大丈夫じゃないやーーーと言おうとしたのも、咳き込んでるから無理だ。

なんだつて？

神様？

姉さん神様と密会してるの？  
うー考えがまとまらないや・・・

でも確実にボクは、姉さんのめちゃくちゃな人生に巻き込まれてる  
と思ひ・・・

あるエルフの少年の物語 第1-3話

「つーまーり、あたしは神になるつもりは無いし、あのおっさんが何企んでるか

分かるまで、会って話すつて説ですたい。」

「んー騙すの？」

「そりつと要約・・・しかも純粹な田で見ないでよ、心が痛い」

今日のメモ、姉さんにも罪悪感があつた。

「何かいとむかーつ！」

「ハンッ

今日もハンマーですか？

わざわざらつと壮大な話を聞いたと思つたら、それは実は騙しでした

みたいに感じになつてます。

流石ねえさ・・・いえなんでも

「んあ？何か言つた？」

「何も言つてないよー」

するビーム・・・

で、今日は朝からクエスト。

「おーい、・・・あれ？名前忘れた。誰だっけ？」

「ボクも知らないや」

「アルピングと申します。」(二)の庭師をします」

誰？

王城の庭師というアルピングさんは色々な意味で影が薄い。

「シネイドさんから話は聞いてますよ。

バイヴ・カハの護符を探しているんでしょう？」

「そーなんだよにやー何か知ってるの？」

「ええ、それがですね・・・」

うん、恒例の大人の事情以下略・・・

で、何故か結婚式のための資金調達してきなさい？（二二二二）的  
になつた。  
なんで！？

「いいじやないかにやー結婚式をのろ・・・ゲフン祝えるんだから

「今なんか不吉なこと」

「さあ行くよスペルー」

話をそらされたつ

「今日の試合の選手は誰かなつ？アシヴィン来たの？」

「はいはい、リリスト呼び？」

「ふふー呼んだ呼んだ！・・・ところで後ろのエルフさんは誰ー？」

「「うのの弟ースペルニアって書つんだよー」

「よひしきお願いします」

軽く自己紹介をした。

明るくてこつも楽しそうして見える少女。リリスちゃん。

「や、早速だけど頼んでいい?」

「何をせるつもつですかにゃー」

「あ・う・は・ねー」の

弋ヶ原

田の前に立つまれた荷物・・・「リリス3点セット」と書かれている。

ビーニーだと?

「リリス3点セットを売り出したい欲しいのよー...そしたらお金だしお金だしあげる」

「自分でやうんかあああああー...」

姉さんが叫びたくなるのも分かる気が・・・(苦笑)

「姉さん、 やるしかないよ・・・」

「ええー・・・しゃーないー...やればいいんでしょー...」

「よひしきーーー」

手をヒラヒラさせながらコロコロとまわる。

「お、アシヴィンじやない?」

「ほこキースあげるーお金もひつねーじゃねーかなー」

「まだひとつ、鬼。

「売れたよリスー！」（元元）

「おお～…わっすがアシヴィン！…ありがと～」  
「厳密に言つては売れでないよ姉さん？」

「はい、じゃあこれ…失くさないようにね？」

「はこはこ受け取りました…・・・」

お金を受け取る。

「後は寄付して終わりだにやー・・・ああ疲れた」

「お疲れ様、姉さん」

翌日、銀行に言つたらキースさんにめつけられ怒られたのは  
言つまでもないことと思つ。

# あるエルフの少年の物語 第14話

「護符も無事もひえたにて——」*「ごへい*

「食べちゃダメだよー？」

「まさか、そんなこと…じめね」

「食べる気満々じゃないかつ」

姉さんはダンジョンのボスルームキーも食べるから、すい（尊敬出来ないけど）

そんな話をしながら朝ごはんを食べる。  
なめたらひいん

「最近寒くなつたから、過（）しやすいわあー」

ホケは苦手だよ。冬眠ないんだけの

「わ、いいの!? やつた!!」

何買ってもらおうかなー?楽しみだ

ほふ

今日も姉さんは頭でクエストスクロールを…

「か？く？な」

今回はアタックじゃなくて、スマッシュだつた。

「あー、これだけは一人でいきたいな」「なんで？」

姉さんは一瞬真面目な表情をして、すぐ苦笑した。

「んー…理由は言えないにゃー」「隠し事？」

「そうじやないけど……ええい、面倒くさいー！」

急に腕をつかまれた。

「いーくーぞー！！」

「いきなり180度回転！？あ、ちょっとま

最後まで言わせてええええええええええーー！」

「あれ、誰？」  
「しつ…とにかくハイドしてて」  
途端に、黒い翼をもつた女性の周りに  
見た事無い生き物が現れた。  
何だあれ！？

「ネヴァンのところまで走れっ！…」

「分かつた！」

あの人はネヴァンと喧嘩しきり、今はそんなこと喧嘩する場合じゃない。

走った。

いきなり現れた生き物が、ネヴァンと言う人を攻撃する前に止る。

あの日の再現だけは…絶対しちゃいけない。

「…あれ？」

一瞬にして風景が変わって、暗闇の中に  
ボクは一人立つてた。

## あるヒルフの少年の物語 第15話

「？？？」はゞいなのを…。」

周りに誰も居ない。

さつきまで姉さんとか変なとかもいたのに。

「おーい！誰か居ませんかー？」

「どうしてきたの？」

声が聞こえた時、周りから光があふれてきた。

まぶしいいいいいいいいいいい！

「ね、どうしてきたの？・・・ちょっと！聞いてるの？」

誰の声なんだろ？なんか知ってる声みたいだけど

バシッ

いきなりスマッシュを食らつた。

「聞こえてますかスペルニアー・・・？」

「ななな何するんだい！」

「返事しないスペルが悪いでしょーに」

「え、話しかけてた？」

つていつかいつ居たの！？

「さつきからいたし、見つけたときから話しかけてるつてのに・・・  
まったく天然だにやー」

「う・・・姉さん『天然』つていつのやめ・・・」

姉さん?  
あれえ?

話しかけてくる人は姉さんじゃない。

姉さんこんなにちっちゃくないし、髪形も違うし・・・  
つていうか名乗つてもいないよね？そつだよね！？

「君は誰だあああああーつ！」

「ん？・・・ああ、そつか。あたしはホントは余っちゃいけないものにやー」

「え？」

「つていうか正体とかは言えないから名前だけなんだけど・・・い  
い？」

「それでいいんだってば」

本当に誰だろ！」のトコ。

「名前ね・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

シャティア」

「すつごい今の間が気になるんだけど・・・

「教えようか、悩んだの」

「悩むんだ・・・

「で、スペルは戻らなくていいの？あた……いやアシヴィンはもう外でてるけど」

「うえ！？ そうなの？すぐ戻らなこと……戻るこはビーしたらいいのさ」

「待つて、今開ける」

シャティアはそういうと、槍のようなものを持ちながら田の前に輪っかを作った。

「ん、開いたよ。アシヴィンによろしくね」

「ありがとう！またね～」

輪っかの中に入ると、また田の前が暗くなつた。

うつすらと姉さんの姿が見えた……よかつた、無事だ。

あるヒルフの少年の物語 番外編 ～アシヴィンも巻き込まれたよつや～（前書き）

間、開けすぎて申し訳ないです・・・  
わざわざ頑張って書いひとつと思しますのでよろしくお願いします。

あるエルフの少年の物語 番外編 ～アシヴィンも巻き込まれたよ～

はい、皆さん「んにちは！」

誰に挨拶してるんですか、と聞かれたら「見えない人」と答えてしまつ

アシヴィンですよ～覚えてますかいな～？

で

今は

知らんところに流れ着いてまーす・・・

つて流れたつけ？水無いよにゃここ（笑）

「つていうかせめて電気つけてくれん？なんも見えんのだけどー」

分かつちゃいたけど返事ないわなあ・・・あつはつはつはつは  
とりあえず座るつ・・・あ、トウモロコシ茶があつた！

飲んじやえ飲んじやえ

「・・・なにしてるのや」  
「わあーおっぷしこー！」

「アシヴィンから贈る教訓その三百六十八万三千五百一十一。  
電気つかむときは一言叫びながら、はこぶ

「え、えっと・・・『電気つかむときは一言叫びながら、はこぶ  
くしょ・・・』」

「最後の一言はつかなくていいこつば、あつせつせー。」

・・・んー？

なんか田の前にいる子、初めて会ったときのスペルにやべりだわー  
まさか双子つ！？

「あのや、君もしかしてにーちゃんいるかい？」

「いないよ？何で？」

「いやうちの弟にそつべりだからさあ、てつきつ生き別れの双子さ  
んかと」

「・・・・・・」

ありや、黙つちやつた。

「まあ人違ひだつたみたいだし、気にしない気にしない」

「・・・・・」

な、なんか怖いわー地雷踏んだ？踏んじやつた？戦車並みに踏み潰  
しちやつてますかいな？？

いやそれだと吹つ飛んでるよねえ・・・うーむ

「えーとお邪魔にならないよつやうやう失礼します」にやー

「帰りたいの？」

「うんまあねー・・・そついやスペル置いてけぼりだし」

「分かつたよ。アシヴィンさんブリューナク貸してくれるかい？」

ちゅぢょちゅぢょそんな物騒なもの貸せないわい！

つてしかもあたし名前言つたつけ？・・・まーいいや

「いやいや、何するの？」

「扉を開けるだけだよ。早く貸して」

「あーならいいや・・・つてもしかして君」

最後まで言つ前に、スペル似の少年はポータルを作った。

待てえ！活性化していないのに使えるんかい！！

「開けたよ。・・・じりしたの？」

「君にやー突つ込むところが多すぎだわ・・・といあんづありがと

！」

「じりいたしまして。」

せめて別れのときくらいい笑顔見せておくれよう・・・と思いつつ  
ポータルに入った。

「ん~・・・空氣つまー!」

ポータルの先にはタラのストーンヘンジ前だつた。  
さすがエリン・・・不思議すぎるネ！

「さつてとースペル探さないとなあ」

走ろうとした途端、な～んか「ブ～ル」ってゆー音が聞こえたよ。

はい、踏んでました

それも頭の中心を思っても

۱۵۰ ~ ۱۵۱ ~ ۱۵۲ ~ ۱۵۳ ~ ۱۵۴ ~ ۱۵۵ ~ ۱۵۶

いや待つて、現実逃避してる場合じゃないわこれ  
踏んだのに返事ないよっていうか動きもしないってばこれええええ！？

「返事が無い、ただの屍のようだ」

ニテナニカニイイ!

死んだ事はしてないが、死んでいた事はしてない。

あ、そうだアレだアレ！

フニーックスの羽だつたー そだよまつたくもー

はーとりあえず一枚ピラーン・・・

起きませんねー

じゃあ一枚目ピラーン・・・

あれおかしいなー

出血大サービス三枚目ひらひらー・・・  
あつむえええええ・・・

結論：誰かご説明願います。

うーん・・・生き返らないなー

もしかしてアグネスに不良品買わされたかなー  
商品取替えしろつてメモ送つたろうかなー

「ん・・・あれ姉さん？」

「うひゅーっ！」

まさかの訴えメモ書いてる途中で起きるかい！

「大丈夫だつた？ 何も無かつた？」

「いやそりやあたしのセリフだい・・・羽じや生き返らないからびつくりしたわー」

「え、 そうなの？ ・・・まあ変なトコ行つてたからかも」

「スペルもいつたん？」

あーそりや生き返らんわにゃー

「姉さんも行つてたのかあ・・・  
もしかして姉さんさ、 ボクらに紹介しない妹とかいる？」

「へ？ いなide?」

「そりだよなー」

うんうんと頷くスペル。

妹・・・妹・・・「うーん？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0094x/>

---

迷い音は一つの楽器に

2011年11月30日14時48分発行